



私の覚え書き

宮本百合子自筆原稿

西垣文庫
文庫10
8839



5

の	懐	中	時	計	の	上	に	落	ち	た	。	蓋	あ	し	の	そ	の	時	計	
は	。	明	る	。	正	午	の	光	線	が	金	色	の	縁	が	輝	か	の	世	
作	。	中	。	ち	り	十	二	時	三	分	過	ち	示	し	。	居	る	。	真	白
。	面	に	鮮	か	う	な	黒	字	で	書	か	れ	た	數	字	也	。	短	針	
。	長	針	が	。	狭	い	角	度	で	互	に	開	い	て	居	る	形	が	。	
。	奇	妙	に	あ	つ	ま	り	印	象	に	遺	つ	た	。	警	り	。	一	廿	
。	あ	ん	や	り	し	た	場	面	の	中	で	却	つ	て	時	計	の	鮮	明	な
。	文	字	が	。	特	殊	な	感	覺	も	あ	つ	た	の	が	ら	う	。		
。	知	ら	う	と	。	意	外	に	。	興	味	あ	る	。	注	意	は	。	後	
。	口	あ	つ	て	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。

5
知

の	懐	中	時	計	の	上	に	落	ち	た	。	蓋	あ	し	の	そ	の	時	計	
は	。	明	る	。	正	午	の	光	線	が	金	色	の	縁	が	輝	か	の	世	
作	。	中	。	ち	り	十	二	時	三	分	過	ち	示	し	。	居	る	。	真	白
。	面	に	鮮	か	う	な	黒	字	で	書	か	れ	た	數	字	也	。	短	針	
。	長	針	が	。	狭	い	角	度	で	互	に	開	い	て	居	る	形	が	。	
。	奇	妙	に	あ	つ	ま	り	印	象	に	遺	つ	た	。	警	り	。	一	廿	
。	あ	ん	や	り	し	た	場	面	の	中	で	却	つ	て	時	計	の	鮮	明	な
。	文	字	が	。	特	殊	な	感	覺	も	あ	つ	た	の	が	ら	う	。		
。	知	ら	う	と	。	意	外	に	。	興	味	あ	る	。	注	意	は	。	後	
。	口	あ	つ	て	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。

89

十ノ廿

春

二階と下とを往来して暮らしてしまつた。一度
 おひさし北をりて、又強くなり、はしまいのと
 ・播北ると播けりて居る北をい。皆七、近年
 には強い強震かと感じられた。け北は七、葛逆東系
 にはみ北程のふとが起つて居るよつと、は、夢想す
 るかこころではあるが、何れしろ福井地では
 七月の下旬に雨が降つた。九月一日迄、
 一箇年以上一度の驟雨すつ見あつた。人々
 は、農作物の落しに一帯の雨で七と続き、鳥水と

十ノ月 地震

6

春

春

居る。二百十日が翌日に迫つて居るの
 の地震は天候の変化から前觸れとし、寧ろ歡
 迎に九位ありてあつた。
 果して、午後四時頃の天候が曇り、烈しい
 東南風が吹き始められた。大粒の雨すつ、バリ
 とのよつと来る。北にはあると、林の多い陽原
 には、黒い煙道が走り、白山山脈、蛇平で、
 黄赤なる稲妻の内なるのが見えられた。
 北に、
 強中、二度ばかり、可なり強い地震が眼
 々、
 北に、
 然し、
 愈々、
 北に、
 二百

又

一	旦	に	大	地	震	が	あ	っ	た	後	に	大	火	災	で	全	滅				
久	し	び	り	で	雨	あ	が	り	の	来	や	め	す	に	鑑	れ	た	の	び		
皆	治	り	と	し	た	。	と	し	て	。	流	石	に	集	つ	て	雑	談			
に	耽	つ	て	飛	た	る	時	頃	。	所	用	に	福	井	市	に	出	の	け		
二	居	た	象	兄	が	。	邊	し	い	橋	子	が	歸	つ	て	来	た	。	和		
其	の	君	象	兄	が	。	あ	の	へ	り	あ	さ	い	と	る	や	探	探	に	答	へ
る	な	り	。	彼	は	。	息	を	切	つ	て										
東	京	は	元	ら	ひ	こ	つ	ち	也												
と	云	つ	た	。																	
杉	井	が	き	。	う	つ	ち	向	も	あ	く										

1851
1852
1853

十	日	は	業	外	平	穩	あ	る	と	が	わ	り	つ	た	。	前	庭	の	烈		
何	は	や	ん	。	し	り	と	落	付	い	た	雨	が	降	つ	て	居				
る	。	人	々	は	。	其	の	雨	の	嬉	し	さ	に	。	あ	つ	り	り	昨		
早	の	地	震	の	こ	と	。	あ	の	忘	れ	た	。	彼	等	は	亦	し	ず		
う	に	被	屋	の	こ	と	。	荒	々	と	り	出	し	た	。	と	し	て	。	露	の
を	あ	つ	た	種	の	葉	を	鞆	が	せ	を	り	。	田	圃	の	水	廻	り		
に	出	の	け	る	。																
夕	方	に	あ	る	と	。	そ	の	雨	も	あ	が	つ	た	。						
葡萄	棚	の	下	に	掛	つ	た	杉	井	の	涼	台	。	。	あ	く	薄	縁			
の	敷	け	る	ほ	ど	の	雨	量	し	の	あ	ら	つ	た	。	其	に	。	一	つ	て

十ノ書 雑談

2

正事

引	巖	水	餘	二	約	化	暴	加	レ
つ	金	二	り	居	北	一	動	加	死
と	を	南	突	る	は	つ	と	つ	者
あ	を	り	然	る	に	、	起	つ	敷
る	敷	二	の	る	、	あ	し	二	巾
か	キ	居	大	る	山	る	爆	選	人
ら	レ	左	事	と	権	と	弾	〇	の
な	と	右	有	、	兵	、	を	〇	見
忍	そ	岸	り	、	衛	報	投	〇	止
怖	や	岸	で	、	士	二	二	社	東
も	元	、	喫	、	油	あ	、	告	京
感	句	島	警	、	暗	る	年	〇	市
だ	ち	に	あ	、	報	〇	を	〇	三
。五	耳	〇	る	、	の	〇	火	〇	分
つ	に	〇	と	、	の	〇	の	〇	の
の	あ	〇	、	、	い	〇	海	〇	二
行	る	〇	、	、	さ	〇	と	〇	は
つ	、	〇	、	、	く	〇	、	〇	全
〇	紙	〇	、	、	す	〇	海	〇	滅
〇	に	〇	、	、	す	〇	と	〇	
〇	戒	〇	、	、	す	〇		〇	

正事

つ	学	視	あ	湘	号	地	漢	鏡	だ
一	々	藤	る	南	外	震	み	は	と
あ	の	・	る	地	に	が	始	・	あ
る	地	帝	〇	方	よ	東	め	立	る
〇	震	劇	か	に	北	系	た	つ	わ
か	要	・	ら	大	は	か	〇	た	こ
の	不	三	の	地	、	ら	、	あ	っ
内	選	越	時	震	一	〇	、	、	ち
、	〇	・	ハ	が	日	、	、	、	や
海	〇	白	十	あ	の	、	、	、	が
上	〇	木	四	り	十	、	、	、	〇
ル	社	屋	十	、	二	、	、	、	
ゲ	告	東	管	多	分	、	、	、	
マ	〇	京	所	く	前	、	、	、	
二	〇	驛	か	の	前	、	、	、	
グ	〇	・	ら	気	東	、	、	、	
内	〇	布	先	屋	系	、	、	、	
を	〇	口	ち	が	及	、	、	、	
け	〇	大	菜	倒	、	、	、	、	
け	〇	九	し	壊	、	、	、	、	
で	〇		、		、	、	、	、	

十ノ書

9

の時、孫の菜とりに行つた在邊が、電信柱に
 結りつたから兵隊に刃付鉄砲で刺殺す水と
 るや、目比倉の焼打ちの時か何か、隣南を小
 耳に撓んで以来、戒嚴をとるや、ことは、^{和に}何と
 も言つない暗黙と惨害さとも暗示あるのか。
 和は、一時に四方の薄暗さと冷気が身にこた
 へる張りの上で、堅唾ものんび、報道も聞
 いぬ。いんち田舎の新開地、戒嚴を敷い
 ることまで誤報はしまり。さうすれば、いん
 ちに軽く見積つて、昨日の十二時以後東京

十ノ時 東京

ば、その非常手段も中要とあるだけ危悪な擾
 乱にあることだけ確か。
 和の思ひは、忽ち父の上に乗んが。父の事
 務所は、丸の内、休通にある。時刻が時刻が
 うう多忙な彼は、いんち庭に居て、笑害に遭
 つたの知れぬの故。心も落つて、款こるや
 りに、何の魂も居らざる感にも、握あうと
 しぬが、一向凶殺らしむと、すめまは生じぬ。
 次は、弟は、姉は、^{和に}しぬらうと思つた。彼は夏
 休以前、^{和に}孤獨で、^{和に}孤獨期に向つた者、^{和に}山田

高野

ち眠り決して得たつては處ひあり。
 ほんの瞬ちある向に此等のことと考へ、中心
 あり、その理由曲りある池の家族のそとち思
 い、それ、心が冷静にあつた。と水に、水に
 ・号外の全部に詳し、半信半疑な心持にあつ
 た。全部の交直、通信機関が途絶して、未だ
 在以上、内部の正確な報知も、容易に得ず水
 あり、澤山。攝政官の行衛不明、
 帝~~皇~~尤も全焼と云ふ藩原が、特に疑を感ぜし、
 世に。下級政界が動搖して、現在最中あり。

房の火礫、或は鎌倉に行つて居たか、水が
 の。其等の地下は、その号外によれば津波で
 洗はれ、村舎の影さつて認め得ない程にあつて
 居るらしい。この地。川水は、是も、理性に詳
 へて考へて見れば果して感ずる心配以上、
 鏡く心に思ふものがある。私には水に、二人
 は命に別條ありと云ふや、確信に達し、
 拵り得た。私と彼等二人との心の際り、深く
 ・かろそこのあつたのであつた。万一彼等の生命
 に何事ありあつたか、昨日、彼那のびやの

16

在	二	リ	行	あ	列	と	ッ
郷	車	段	く	し	車	と	二
軍	の	々	し	着	は	自	振
ん	の	々	い	上	人	引	押
、	聖	々	快	に	と	と	る
洛	因	々	速	電	貨	で	腕
所	案	々	カ	車	物	経	カ
夫	が	々	で	走	を	験	が
、	一	々	走	ら	満	あ	だ
警	つ	々	た	、	載	る	ん
官	毎	々	。午	時	し	好	者
ま	に	々	前	三	、	機	働
ど	一	々	時	時	高	會	も
の	騎	々	三	と	汗	で	あ
場	張	々	時	、	を	あ	ら
が	の	々	と	停	滲	つ	は
あ	度	々	、	車	ま	な	あ
ら	増	々	停	あ	せ	と	り
り	一	々	車	る	る	そ	い
、		々	あ	急		お	
洛		々	ら			ち	
所		々	り				
夫		々	、				
、		々	、				
警		々	、				
官		々	、				
ま		々	、				
ど		々	、				
の		々	、				
場		々	、				
が		々	、				
あ		々	、				
ら		々	、				
り		々	、				

上	見	葉	た	が	の	武	と	ら
野	二	は	者	リ	束	裝	忘	ハ
の	段	つ	あ	の	と	を	れ	、
急	る	く	り	あ	道	湘	九	年
行	七	せ	り	り	身	い	九	齡
に	の	ま	り	、	袋	た	九	に
乗	は	あ	。誰	、	ち	十	九	拘
せ	あ	く	も	自	肩	倍	十	ら
、	く	、	分	の	に	五	五	お
山	、	又	足	足	う	聯	五	平
崎	押	、	許	許	け	隊	五	時
は	し	、	ち	ち	た	の	五	の
、	押	、	し	し	工	身	五	情
人	す	、	わ	わ	夫	兵	五	態
ら	水	、	り	り	の	、	五	な
が	、	お	お	お	大	尤	五	い
落	お	ち	ち	ち	群	き	五	は
束	ち				。乗	な	五	さ
に	り				客	電	五	ら
な	り				線	線	五	り

十ノ會報

5月
1945年

知	了	知	ら	ない	に	拘	ら	が	因	り	方	向	に	行	く	者	は
・	組	み	に	あ	つ	た	。										
・	若	も	自	分	に	あ	つ	て	戻	り	抑	止	め	ら	れ	た	。
・	自	分	の	便	宜	も	研	究	に	分	け	、	荷	負	ひ	の	た
道	伴	此	に	あ	つ	て	葉	は	わ	と	勸	誘	あ	る	。		
順	意	に	行	け	ば	午	前	九	時	十五	分	に	着	る	べ	き	列
は	十	二	時	五	分	延	着	て	、	午	後	九	時	過	、	廿	七
端	末	で	表	を	、	糸	井	の	列	車	が	、	始	め	て	川	口
村	田	の	鉄	橋	を	通	過	し	た	。	その	日	の	夕	、	大	宮
21	の	あ	つ	た	終	業	が	、	幸	日	暮	暈	ま	が	の	お	た

死	者	の	身	の	こ	と	が	皆	を	驚	し	た	。	誰	に	お	る	と	、
命	め	け	て	、	不	幸	な	人	々	の	死	屍	を	見	な	い	に	お	一
町	の	道	筋	を	歩	け	な	い	程	が	。								
経	験	の	あ	る	人	々	は	、	暗	兵	に	呼	び	止	め	ら	れ	た	。
の	應	答	の	し	ら	り	を	流	明	あ	る	。	先	歩	で	行	く	者	は
北	州	の	あ	い	危	区	の	順	路	を	教	へ	る	。	何	に	し		
こ	も	、	砲	火	の	危	険	極	と	な	る	の	に	、	列	車			
は	延	着	あ	る	一	分	で	、	東	京	の	目	前	に	見	え	が	、	日
が	暮	こ	し	ま	つ	た	の	で	、	皆	の	心	配	は	、	種	々	な	形
21	の	あ	つ	た	北	州	。												

十ノ音

危

24

生

の	快	活	あ	下	わ	め	き	が	あ	一	つ	と	煙	の	ゆ	ら	に	何	
を	う	に	活	え	二	仕	舞	つ	た	と	感	ら	る	の	あ	ら	に	何	
今	迄	自	分	の	魂	の	あ	り	か	こ	ろ	と	あ	つ	二	居	た	種	
々	の	こ	と	は	此	場	合	走	え	と	あ	り	却	水	な	い			
薄	葬	な	ゆ	り	あ	つ	た	り	か	墓	個	に	地	震	と	火	事		
二	例	す	北	焼	き	盡	さ	れ	る	ゆ	の	あ	り	か	う	う	か		
	日	日	日	経	つ	ろ	ち	に	私	は	次	第	に	違	つ	た			
心	拵	に	あ	つ	二	未	た	。死	者	ち	一	二	死	者	を	葬	ら	し	
め	よ	し	と	あ	ら	ゆ	心	拵	の	あ	る	。焼	け	二	滅	が	る	ゆ	の
は	思	想	と	物	質	と	に	あ	り	は	う	が	滅	が	あ	る	。ん		

生

あ	う	覚	つ	の	あ	り													
純	く	構	下	と	思	つ	二	居	た	と	こ	ろ	が	廣	く	と			
見	直	し	の	利	く	坂	道	に	あ	つ	二	居	る	机	を	と	は	見	
る	者	に	氣	傷	も	そ	ら	か	に	は	居	な	い						
心	に	中	レ	悔	禮	の	あ	つ	た	故	う	歸	系	一	二	數	目	の	
百	一	物	は	尤	仕	掛	を	物	質	の	壊	滅	に	伴	わ	一	種		
男	机	を	精	神	の	空	虚	も	堪	え	難	く	感	ら	る				
今	ま	が	在	つ	た	ゆ	り	が	。こ	う	無	い	。と	ろ	ろ	ゆ	心	拵	
は	建	物	を	け	に	限	ら	な	い	。疑	ゆ	の	に	雜	志	新	聞		
に	南	え	二	居	た	思	想	の	声	藝	術	の	響	精	神	活	動		

十ノ十ノ四ノ四

ゆ	望	勇	生	に	し	筋	の	つ
ら	を	勝	活	に	た	り	筋	ま
に	持	が	も	に	さ	け	育	り
大	つ	り	纏	に	と	け	に	知
膽	つ	り	め	に	と	は	比	つ
が	を	び	計	に	居	は	倣	を
吹	熱	失	画	刻	居	い	れ	お
き	心	せ	あ	々	在	装	れ	ひ
豪	に	る	る	変	怯	飾	た	.
雨	廊	い	中	化	懦	の	遠	あ
で	あ	上	要	あ	の	遠	藤	の
か	水	の	に	る	海	無	.	あ
と	で	ち	化	四	咸	か	一	あ
私	居	々	う	周	日	ち	種	は
は	る	々	北	り	外	一	の	五
に	か	々	水	事	の	種	年	年
	昨	々	を	情	年	の		
	夜	々	と	の	と	後		
	の	々	は	中	に	う		

ゆ	女	深	力	力	力	尚	意	精	切
須	性	い	で	ハ	ハ	認	念	神	有
る	と	事	草	丸	丸	め	の	の	何
こ	一	実	新	丸	丸	得	の	の	の
と	こ	と	の	地	地	る	雄	耀	の
.	の	一	生	盤	盤	。	々	々	の
さ	生	知	活	も	も		レ	々	の
ら	の	つ	の	と	と		さ	々	も
ご	上	二	上	つ	つ		自	々	も
ち	あ	居	あ	ル	ル		ま	々	昆
い	ら	る	ら	の	の		は	々	出
ら	も	の	水	の	の		る	々	し
と	本	あ	を	意	意		の	々	・
の	堂	は	こ	志	志		長	々	境
区	に	生	と	を	を		風	々	お
別	生	活	也	超	超		を	々	絶
ち	活	に	高	え	え		葉	々	望
は	に		妹	た	た		の	々	せ
							種	々	お
							に	々	澆
							七	々	刺
								々	と

